重修真書太閤記 二編 [illegible]

ヘ13
459
11

柳葊栗原氏挍訂

重修真書太閤記 貳篇 全十冊

東都書肆 知新堂發兌

459
11
同攻會印

重修真書太閤記二編總目録

巻之一
織田殿奇兵間道に趣く事
并今川勢所々の砦を攻落す事
柴田池田勇戦高名乃事
并前田孫四郎武勇の事
巻之二
桶峡間合戦義元朝臣戦死乃事
并今川勢總敗軍の事
織田殿首實撿の事

并 前田孫四郎勘當を免る事
巻之三
今川義元朝臣の首駿州へ贈る事
并 鳴海大高兩城退去乃事
木下藤吉郎江州へ禮使の事
并 岡崎と駿府と不快の事
巻之四
織田岡崎和睦對面乃事
并 織田出陣評定の事
織田殿美濃國發向の事
并 齋藤家軍評定乃事

巻之五
信長難戦を好危急の事
并 木下莚の指物にて味方を救ふ事
木下五色の指物蒙免許事
并 瀧川一益服部左京亮を欺く事
巻之六
瀧川一益桑名乃城を乗取事
并 服部左京怒て蟹江の城を攻事
信長上洛將軍家へ御目見乃事
并 三好長慶信長を探る事
巻之七

織田殿再度濃州へ出馬評定の事
并佐久間信盛洲の股ニ砦を築く事
柴田勝家信盛ニ代りて砦を築く事
并日根野備中守兄弟勇戰乃事

巻之八

信長重ねて砦を築く評議の事
并秀吉智計以て砦成就乃事
蜂須賀稲田等戰功の事
并齋藤勢兩度敗軍の事

巻之九

秀吉智謀敵兵を破る事

并信長藤吉郎ニ感状を賜ふ事
蜂須賀稲田等織田殿ニ拝謁の事
并木下藤吉郎墨股城所置乃事

巻之十

大澤次郎左衛門織田家ニ屬する事
并信長大澤が降参を疑ひ拒む事
木下仁智大澤を助くる事
并木下竹中が閑居を訪ふ事

巻之十一

木下藤吉郎竹中半兵衛問答の事
并竹中歸伏齋藤家由來乃事

巻之十二
竹中重治秀吉の寄親となる事
并信長稲葉山城下出張乃事
信長清洲へ帰陣の事
并秀吉父母親類を招請の事
巻之十三
秀吉謀て西方三人衆を招く事
并稲葉氏家安藤等帰伏の事
木下小市郎初陣高名の事
并信長小市郎へ一字を賜はる事
巻之十四
秀吉三人衆に神策を示す事
并織田殿洲の股へ出馬の事
三人衆かり小洲股城を責る事
并織田勢稲葉山を取圍む事
巻之十五
織田勢稲葉山城攻難儀乃事
并竹中半兵衛義心の事
秀吉主従七騎間道に趣く事
并堀尾茂助深山の猛獣を狩事
巻之十六
堀尾茂助閑道案内者乃事

并秀吉主従敵城へ忍入事
織田勢稲葉山二の丸を乗取事
并木下藤吉郎龍興開城を勸る事
巻之十七
龍興稲葉山退城の事
并織田武田と婚姻を取結ぶ事
瀧川左近一益注進乃事
并信長勢州出馬の事
巻之十八
楠七郎左衛門正具防戦の事
并織田殿自身髙岡城を攻る事

山路彈正民屋竹木を焼事
并木下虚實を計り城を攻る事
巻之十九
山路彈正偽て降参を請事
并柴田木下争論の事
楠が智謀に依て織田殿陣中巷説の事
并織田殿勢州より歸國乃事
巻之二十
織田殿木下が明察を感じ後悔の事
并丹羽林等勝家秀吉和平を取結事
木下藤吉郎遠計言上乃事

并織田殿佐々木義秀を聟にせんとする事

卷之二十一
織田殿重而勢州發向乃事
并木下藤吉郎仁義の軍乃事
木下山路に利害を說事
并山路本心降參の事

卷之二十二
山路彈正神戸を降る事
并神戸藏人織田家に屬する事
關長野両家降參乃事
并織田殿勢北を鎮め歸陣の事

卷之二十三
三好長慶權勢乃事
并松永彈正三好義長毒殺の事　附三人衆室町殿襲事

卷之二十四
長岡藤孝覺慶得業を救ひ奉る事
并三好松永確執義榮將軍宣下乃事
新公方江州御滯留の事
并佐々木義弼新公方を害せんことを謀る事

卷之二十五
新公方家箕作城渡御乃事
并長岡和田船用意の事

巻之二十六
或人右衛門佐義弼異見の事
并承禎父子京都へ通達乃事
新公方家朽木谷へ御開きの事
并越前朝倉氏由來乃事

巻之二十七
朝倉義景新公方家を請待の事
并新公方家御元服の事
濃州明智家系乃事
并光秀諸國修行の事

巻之二十八
光秀朝倉家に仕官の事
并光秀公方家美濃御動座を勸る事
新公方家濃州へ御動座乃事
并信長はじめて新公方家に御目見の事

巻之二十九
江州淺井家由來の事
并安養寺三郎左衛門異見乃事
織田淺井縁者となる事
并信長佐和山へ趣く事

巻之三十
信長長政對面の事

并遠藤喜右衛門信長を撃んと謀事
秀吉智謀危ふきを防ぐ事
并明智光秀信長に仕官の事

重修眞書太閤記二編總目錄 終

重修眞書太閤記二編巻之一

織田殿奇兵閒道に趣く事
并今川勢所々の砦を攻落す事

織田上総介信長清洲を出馬ありて熱田の宮にて後れし軍勢を待つけ祈禱乃願書上差の鏑に添て奉納しけるに社壇のうちに轡の音して東に馳行又旗に先立て白鷺の瑞ありしより只今迄氣臆もしたる軍兵暴に勇みたち神明擁護の背を廻らさゞる上ハ今度の軍必ず勝利疑ひなしと颯ゞめきて押ゆきけるが源大夫の宮乃前より東の方を望めバ黒烟天に覆ひて

夥しこれハ鷲津丸根の砦をや落しとおぼえたり
源大夫の宮といふも延喜式ニ上知我麻神社と記さる
祭神ハ尾張氏の遠祖乎止與命なりといふ今も熱田
市場町傳馬町乃突止りにあり此宮より鷲津丸根ハ
東南にあたれり
速にはせ向ふて敵を討べしと織田殿あせらふ氣をいら
ちたまへども路ちかき濵手ハ折ふし汐さし満て通ひがたし
然ば笠寺の東上道の細縄手を行やとて揉にもんて打玉
へば辰の下刻ニ丹下乃砦に着陣あり柴田をはじめ迎え
奉り悦ぶことかぎりなし時に木下藤吉郎と兼て謀り
玉ひしことなれば中島の砦へハ猶さざ進ミ給ふに屆しと

ありけると
一説ニ織田殿熱田宮ニ詣玉ひ夫より春敲門を出蛇
塚を經井戸田にかゝり山崎より野並古鳴海戍過て
太子が根ニ陣しそれより桶狭間に衝入給ひしとあり
此説熱田の田嶋某が家ニ傳ふる處にてたしかなるを
とへり然らハ源大夫の宮乃前より笠寺道にかゝり
給ひしハ他人を以て假に大将と見せ玉ひしなるべし
柴田大ニ制し奉りけるハ中島といふ処ハ左右深田にて
道ハ細し是を打せなバ味方の勢を敵に見すかさるゝ
なし釼や中島ハ大敵を引受て防戦をなすべき便なく
唯此處にあつて海し要害によりて御合戦なるべし

さて織田殿柴田を近くめされおのおのある阜に付く敵を本道へやり過し山際の小道より今川の本陣へ切て入らんと思ふ敵は鷲津丸根の砦を落し勝に乗て勢たけく無二無三に進んで押来るべければ此両處の砦に馳かるふ勢を定めて山の動き出るが如くなるべし汝等強くさゝへて防ぎなば敵の内にても鷲津丸根に向てばりしものなる一同に寄来り手柄を諍ひ戦ひなんによし然らんには義元の本陣は以の外無勢にて必定無明の酒に酔ふして生體なからんその処へ押よせるならいかでか大将を討ざらんさらば此砦にて敵をあしらひ防ぐ術ぞ大事なり心得たりや権六郎と宣へば柴田大に甘心し

かゝる御謀の上は某此處にていかにも敵を引寄て軍を長く持さゝへ申べしその間に進ませ給へやと御請申てありち口にむかふ

此時織田殿善照寺の東山の峡に勢揃有ければ三千五百餘騎ありけるが天晴勢や五千餘騎とも申べしこの勢にて敵を切まくらんと案の内は皆く心安くおもひゆへと勇氣をましけれ進ゝまぬ処に佐々隼人正千秋四郎織田殿の旗を見るとその儘山際に扣えし今川勢の中へ懸入り北より南西より東と懸破り懸通り切りけれ切まくりけるが終に二人共討れけり是を見て岩室長門守継いて懸けるが

枕を並べて討死せり敵兵競ひ進みて頸を取本陣へ持参
し實撿に入る義元物始よしと喜び今朝ハ敵の砦二ツ
攻落し只今又多の敵を打取しハ全く今川勢の鎗先
はやき故なりいか成天魔鬼神なり共たまるまじ舞や
歌へやとて酒飲たけて居られしと云々
織田殿の旗馬印を丹下の城に立られしかバ余所目なる
ともに籠りまし者もと残見へけり又善照寺の北に
當て鳴海より熱田へ通る道あり爰にハ織田大隅守信廣を
大将として林佐渡守簗田出羽守を相添一千餘騎なれバ
江州の加勢一千三百余人都合二千三百餘人を置れけり是ハ
敵を八方に引散さんとの謀之然して織田殿ハ中島より

山の腰を廻り敵の後へ出んと纔に五百餘騎山の峡に隠
れ敵乃先陣を遣り過さんと待せけり此時木下藤吉郎ハ
中島の砦に入り前田孫四郎に面會し松山新吾を討たる
始末を聞て大に悦びけるより織田大隅守の持口へ至り
軍忠致さるべしと云ふより前田ハ織田の陣所へ赴しが
行柴田勝家をはじめて大将の軍配を聞何様爰にて手
柄ある軍して敵の勢ひをそぎ寄んとおもひけれバ
佐久間信盛もこの由を告知を持場とて嚴重に守り
たり今川勢ハ中島乃要害を攻取んと三万餘騎を二手
に引わけ押寄たり西の砦をバ梶川五左衛尉佐久間左京
三百餘騎にてこれを守り東の砦にハ水野帯刀山口海老

之丞等三百餘人にて籠り居たり寄手は富永伯耆守
朝比奈小三郎今朝よりの軍に勝し勢をそのまゝ押
来り火水になれと攻たり砦乃大将水野山口心だらりは
猛くとも一萬餘りの大勢に揉立られ切ば入替撃ば押寄
敵も次第に勢かさみ味方は次第に討死しその身も數ヶ
處手は負ぬ今は是までぞと人手にかゝらんより我とといふまゝ水野
山口差違てぞ一死したりけり今川勢は勝にのりて我乃勢
山をも抜べく千丈の堰乃決る如く人馬の息をも繼
せず真一文字に善照寺の砦へ押寄たり善照寺には真
木與十郎伴十左衛門三百餘騎にて籠たり抑この善照
寺と中島の砦とは三方に立ならび鼎の三足のごとくなり

然るに中島の東乃砦落しかば今は定めて敵よせ来る
べし用心して待やといふ間もあらせず駿河勢一萬五千
餘騎にて押寄たり又おなじ時に中島西の砦へも一萬
五千餘騎ひしくとをき付及で仕寄をも付ば手取に
せんと攻寄たり兩砦の大将いづれも剛の者なり能防ぎ
戰ひけれども左右我く乘取難く敵も多く討れたりしに
より三浦左馬助義次たゞしく廻りて下知しける様は
尾州侍何ほど能戰かとも斯の如き小城ろ勢はたかゞ
三四百籠りたらんなるを一ヶ五千の軍勢にて攻あぐむ
といふことやある鉄炮の組乃ものを真先に立てすきま
あらせず打かけよや然らば敵定めて色めき立て見え

なんぞ扠まいを遁さじ乗入やと聲を限りに呼はれば承
たりぬと云るがう三千餘挺の鉄炮をそろへたちまちに放
かけたり何さま多くの鉄炮乃音すさまじく響きては
大山も崩れ落るかと夥しく三千の玉乃飛びは霰よりも
はげしく雷のごとく閃めけば城内以の外に周章し防戦
の術盡はてて茫然たる処に寄手一度に押寄塀に手を
かけ乗入たり爰彼を守りける兵士是を見て思ひくに
落行ば大将真木與十郎伴十左衛門尉おしならべて亂軍の
うちに犬死せんよりは大将の馬前にて切死なし一死やと云
ながらこれも同じく落たりけりかゝるほどに善照寺の砦
をも三浦が手の者入替る今朝よりの軍に鷲津丸根中

島の東善照寺とても四ヶ處の砦を攻落し今川勢破竹
乃勢ひにて中島の西よりおし寄三千餘騎にて攻たりけるに
より梶川佐久間討死して砦は終に落たりけり寄手まれ
まことに勇みたち五ヶ所の砦を落して大将多く討死し
ける由を本陣へ注進しければ義元朝臣大に悦び聞し
にも似ぬ尾州侍の軍ぶりかな然らば今まで信長の所々の
戦に切勝その勢恰も虎の山によりて龍の雲を起すに似たり
なども言しは童遊のたわぶれごとに等しかるべし去は東國
の武士の一人をもつて西國の兵士の十人に向ふといひしも偽
ならば我鋒先にて尾州を切取んこと今日一日を過ぎはず
と荒言し打寛ひて先手より丹下を落さし注進あるを

直に清洲へ押入べしと何の用心もなく芝居に下立居給ひたり丹下の砦にてハ柴田権六郎勝家今川勢なぞふ五ヶ處の砦を落しけりと聞もや敵よせ来るべし敵ハ聞ゆる四万餘騎されども長途に労れし輩といひ今朝よりの合戦に人馬共さぞ疲をつらん味方ハ誠に小勢なれども新手なり勇士之砦に籠りて居ながら敵を待も待遠しいざや打出足場よき途中に待うけ平場の戦に餘敵を撰打して切崩すべし同心し給へ佐久間どのと両處の砦し合砦なるを織田殿の旗馬印をおし立て大將爰に籠らせ給ふが如くかまへたり柴田坂井名古屋も砦をまかるゝと三町計に備を立させ佐久間森池田ハ左の方ゟ

おのおの引わかれて隊伍を配り織田大隅守の陣へ敵此方へかゝりなバ時後を絶切なりにあし給へと約束し寄手遅しとまちけれども今川勢富永三浦朝比奈飯尾庵原葛山六人の勢三万餘騎真丸に備へて押かけたり両陣の間ちかづくとありて見わたせば丹下の砦に織田殿の籠りまふと見へて窠の紋乃旗風に飄へり扨ハ爰こそ織田の本陣なるべし此砦さへ落したらんには大將を討取んは手乃中にあり尾州の落居只今のほどぞ進めや人々かゝれや物共と鬨の聲を作りかけて寄来り柴田佐久間の備を打のぞむにちかづくに二千餘人に過じと見へたりそれに合せて味方をかへり見れば野も山も人ならぬ處もなきほどの大軍なれ

と道狭ければ一度に進みがたしさらバ手をわけて
戦ふべしとて三万餘騎を六手に分ち一番に庵原右近大夫
忠春五千餘騎にて柴田にかゝり二番に富永伯耆守氏繁
五千餘騎にて佐久間にむかふ
庵原右近大夫忠春ハ田原藤太秀郷八代藤左馬允俊
忠の後胤なり俊忠はじめて駿河國庵原郡庵原郷
に住しその子忠弘右大将頼朝卿富士野御狩の供
奉して庵原三千町の地頭職を賜はりしより以来累
代こゝに住し庵原を以て稱号とす忠弘六代安房守忠
俊今川國氏の妹に具して平次兵衛忠廣を生む忠廣今川
基氏に屬して元弘建武の合戦に功あり基氏の嫡子五郎
國範駿河の守護職を賜はり在國しければ國人ども
しか家人の列に等しくなりたり忠廣より九代安房
守忠胤といふもの則ち忠春の父なり或云桶狭間にて
討死せしハ忠春の兄美作守元政なりといへる何か
是なるをしらん
三番朝比奈小三郎泰秀四番三浦左馬助義繼五番葛
山備中守勝吉六番飯尾豊前守と定めたり
葛山備中守勝吉はじめハ維貞といふ駿州竹下乃
住人なり我の家説に尾州笠寺の城に住せしと云ハ戸部
新左衛門誅せられし後のことなりや

柴田池田勇戦高名の事

并前田孫四郎武勇の事

尾州方の大将ハ今川勢は手分して押来るを見て柴田勝家馬の上に立上り大音聲にてやゝ敵ハ大勢を頼みて味方を輕んじ備しどろに隊伍をみだし競ひ来るハ一手〳〵の功を争ふをもつてなり味方ハ二千餘人に足ぬ小勢なれバ駈向て切崩さんとするは難くもあるべけれども入替る勢のなけれバ味方の労れし跡をくろむるに事かゝるべし去バ兩勢を一川にして四手に分て戦ふべし但敵に打合バ葉武者に目をかけずその手乃大将を撰て打取べし大将だに討捕なば残黨おのづから敗走すべしと謀をさだめ合てけり

此時柴田四組備を車がゝりにすべしといふハたとへバ四組の車がゝりといふハ先備にて鉄炮を打かけてさつと引バ二の備にて箭を射込てさつと引三の備にて長柄の鎗を入て扣き立四の備にて馬を入侍の鎗之次に一の備乃鉄炮玉を込替てその間〳〵に交りて敵を打侍の鎗を助るやうにせしなり

勝家五百餘騎を前後に立て鉄炮を放させ黒烟の下より鎗の穂先を揃へ真一文字に突かゝる勝家真先に進みて織田家にて人も知る柴田権六なり今川方乃大将に見参せんと名乗かけて輪賓の山を崩すが如くなりしをかゝる今川がたの軍兵どもかねて尾州にけるものありと聞

知られば是こそ音に聞ゆる鬼柴田なれ尋常の武士ならば
心臆して懸合もせで過ぎなん只大勢が中へ取込て打やと互に
義勢だらけにて近よらねば庵原右近大に怒り云甲斐なき
その共乃軍の仕様なる鬼とも云へ神とも云へ上方武士のぬる
若ものそかましきにて高名もしと聞ば誠に東國武者の
ちからを見せんそとて退きとよばはりて馬を真先に進め
鎗を合せ柴田もさらばと庵原と見知て莞尓と笑ひおなな
じく鎗を引さげ鍔ぎはにて突合たり庵原さきり
に氣をいらり只一突に突落さんと勢猛くすゝみけれど
勝家さらぬ偽りて鎗を取落しければつめと馬を引返しに
庵原おもしく勝にのり味方をもたのまず只一騎いつくまで

追と追来る柴田引返し時分はよきぞとおかひかまゆれば
三尺二寸の太刀をひらつて庵原が鎗を切落し二の太刀ふるに
右の腕をさして切大力の柴田が打太刀なれば何かは以て
たまるべき庵原馬よりどうど落る所を勝家が侍ら柴田
源左衛門尉走よせ寄て首を取勝家これを見ぬふりし
ふて五百餘騎魚鱗に備へて馳かゝる今川勢は五千余騎
大将討れて周章し右と左へ散亂し此手ははや敗を
とり勝家は我勢をまとめて静かに引退勝鬨乃聲を揚
ふまゝり今川方二番の大将富永伯耆守庵原が弔軍せよ
やとて五千余騎をめいてかゝる尾州方より池田勝三郎
五百余騎にて出迎ふ但池田が軍配は百人の足輕を真先に

立て鉄炮うたせ馬武者のあとひくに鎗長刀長柄の
足軽をまさきにたて立かゝれバ駈られたり富永ハ庵原
が軍にはやり過て却て敵に欺かれしを知られハ味方を
勇め隊伍を正して静々と馬を歩ませよる然るに池田ハ
富永が用心の躰を見すまし近々と打寄て鉄炮をはなちて
打に打たるにより富永が兵士若干討れて進ミ得ず少
し色めきて見へたる処を三百餘騎馬の鼻をそろへて掛
たりけれバ富永勢退んとするに道せまく左右ハ深田之
跡より大勢沓の子を打し様に續きたりけるをいかにと狼
狽まはる処を長刀鎗長柄の歩武者ども命を限りにはよく
働きけるにより今川勢立あししどろに敗走れバ富永らの

躰を見てこゝろぐるしきもの共乃振舞なるあれ計の小勢に
切立られてとりみだしやある追取圍て一人も餘さず打とれ
やと下知すれども大勢の崩かゝりしをなかなか急に立直
しとかくて殊に今朝より五ヶ處の砦にて骨を折涯分労
たる兵士なり馬強き新手の武者に掛られ何かは以て
怺ふべき道もなき深田の畔を傳ふて散乱を富永まくるを
我等が手を下さで叶はぬ処なりと鎗を取て真先に進ミ
池田が兵士殘やよりに五六騎突伏ければども池田が侍
共ハいつまでも今日を限りと思切たる者共なればちとも去ハ
ず富永が前後左右より寄合鎗を付たり富永これ等を
あしらふて透間なく戦ひたる処を池田の侍に片桐半右

衛門尉と云者鉄炮を以て近々と狙ひよりて火蓋を切バ
あやまたずあたまをうたれて伯耆守馬より下へ落るを
そのまゝ半右衛門たゞ走り寄て首をとる富永が五千余
騎大将うたれしかバ次第にくづれて散乱を池田が兵士追詰
追詰これを討鬨を擧て引返を今川方にてハ先手の
大将二人を討せ後に扣へし朝比奈三浦葛山飯尾大に
驚き平場の合戦といひ然も味方ハ大勢なりたゞの敵に
切崩され見ぐるしき負軍せしをお怒安からね是ハ味方
の大勢をたのミ思慮なき軍をなしたる故にこそ二人の
大将を討せたり此度ハ四人一處によりあひ寄次第を守りて
掛るべし小敵なりとて侮るなとかねて心まうけしたるを

えや忘ぬることのおろかさよと互に助け合て攻近づけバ
佐久間信盛坂井右近森三左衛門尉名古屋弥五郎一千
餘騎にて開き合たり柴田池田ハ後陣に備へて息継居
たり然るに佐久間坂井森名古屋ハ今度こそ面々討死を
遂べき處なり一足も引な引なと耻しめ合今川勢乃二萬
余騎を人ともおもはずかけたりけり織田大隅守二千三百
餘の勢を以て今川の後を討んと押出しけるを見て飯尾
葛山心臆して進ミ得ず然れども敵ハ大勢味方ハ小勢
なるが故に織田方よりもかゝらず兩方睨ミ合て居たりける
が斯てハ果じと飯尾葛山一万余騎にて後なる織田
大隅守と戰ふべし朝比奈三浦一万余騎ハ前なる佐久間

に向ふべしと二手に引分れて備を立るかゝる処に義元
朝臣庵原富永が討れし由を聞玉ひ先陣の者の軍ぶり
等閑なれば侍大将二人まで討死さしぬるべし その柴田
池田を討取て庵原富永が孝養にせよや若者共とや
馳向ひて力を合せよと松井五郎八に軍兵をさし添朝比奈
三浦が手の加勢にさし向又本海道の織田大隅守を追散
せよと朝比奈備中守江間左京温井蔵人石川新左衛門
尉等を先として其勢一万余騎にて善照寺の北の方
より攻かゝる織田大隅守は一千余騎にて朝比奈備中守に
向ひ江州勢一千三百人に飯尾葛山を押へさせ両陣既に
相近きたる時織田の陣より佐々隼人千秋四郎真先に進

て今川方江間温井が三千余騎の中へ面も振らず切入けるが
敵は新手なれ大勢なり味方は小勢にて今朝よりの軍に
疲れたり終に一處にて討れたりかゝる処へ前田孫四郎只
一騎勝をこいる今川勢の真中へ鎗を入弓手馬手に
突立々々その勢あさるも龍の雲に乗じ虎の風に向ふが
如し朝比奈備中守の組下なる遠州濱名乃宍戸弥五郎
友辰と名乗て前田と鎗を合せたるに宍戸が鎗前田が股に
中るといへども薄手なれば事ともせず鎗をばなげすて
太刀を抜宍戸が冑の真向をしたゝかに打ければ弥五郎
眼くらみて少し猶豫しける処を前田はなち入鎗を引奪ひ
只一突に突落し屈ぐて首を取たりける今川勢多かれ

ども前田一人ふ突立られ少し志らけて見へたるふ江間
左京と名乘て馬を飛せ前田に突てかゝる前田ちとも
擬儀せず江間を引付て從横ふ突合けるが終ふ江間を
突ふせて首を取此日一日の戰ふ前田一人ふ討るゝ其夥し
殊ふ鎗下の首十七取しとて敵も味方も一同ふ目を驚
して甘心たり

重修眞書太閤記二編巻之一 終

重修眞書太閤記二編巻之二

桶峽間合戰義元朝臣戰死の事
并今川勢總敗軍乃事

去程ふ今川勢四萬六千餘騎二手ふ分れて戰ひたるふ
先手の合戰織田方强くして今川方の侍大將二人まで
討死し又海道筋の軍も前田孫四郎が爲ふ討るゝもの
多く今川勢左右ふ進ミ得ざるといへども味方ハ目ふ餘
る大軍なれバ新手を入替て責たり織田方ハ外ふ援くる
兵士もなけれバ終ふハ切勝べしとおもひけるをたのミて
火水ふなりて突合たり義元朝臣の本陣ふハ軍の注進

と聞に庵原富永宍戸江間討れたる由なれバ義元朝臣大に怒り日比にも似ぬ駿遠参の武者振なる旗本の面々急ぎ馳向ひて織田方にて今朝より手柄をしたりとぞ云なる柴田池田前田を討取て見せよや吾と勇められ我も〱と打立けれども大将の馬廻りになりたる一千餘にハ過ざりけりその上此処嶮岨き山の峡間にて地形平かならねバ後ハ味方乃領地なり前ハ軍勢段々に備て野も山も旗馬印ならぬ處もなし去バ用心の躰もなく芝居の筵に毛氈しき酒宴して居たる処へ織田方の勇士佐々隼人千秋四郎が首を實撿に入しかバ義元朝臣氣色を直し左もあるべし旗本の諸士能なる働つるも義元が

日比の調練ハかくこそあれ今に信長の首も来るべきぞ尾州を平均せんハ遠からじとてもなげに打笑ひ快よく盃を舉て居たりけるが斯て甲斐なきかれ織田殿ハ鳴海表の関乃聲鉄炮の烟を余所に見て間道より今川乃本陣をさしてぞ寄られたるに木下藤吉郎ひそかに今川の本陣へ至り旗本の無勢なる躰を窺ひ見て今こそ必勝の時なれと見定め引返し織田殿にむかひ掛させ玉へと勧め奉りけるに元より織田殿真一文字に大将乃旗本へ切入らんと馬をすゝめ玉ふ処なれバ云にや及ぶと鞭に鐙を合て打玉ふを尾州勢ハこハ危なしと思ひ今暫敵の容子を見極てのちに進ませ玉ふべしと遅々らじ

と留め奉る人もありけれど織田殿やゝ人々無理に進まんと云けるにあらざれば敵は今朝より所々の軍に切勝たれども労れたるものも多かるべし其上に大将勝軍に心おごり帯紐といて休息してあるよしをとく聞すれしたれば此時節とたゞちに其上味方は今朝より負軍して軍勢の心ゆるれて有ければ深々と寄掛んとは誰も思ひよらざらん處へ取かけて敵の油断をし処を不意に切かけ突立なばなどか勝利を得ざらん寡を以て衆に勝といかなる術をやするり是天の與ふる處なりなりや然れば此合戦すなはち分捕も高名もあるべからず一向大将を討んことを専とすべしと例の大音聲にて仰られければ仰

ときは何さま左様の時をこそまちはべれとて暫めて夜の明し様に心もとなくぞ見へたりける然る處へ木下雅楽助中川金右衛門尉毛利河内守同新助佐久間弥五郎手々によき頸取て提来る織田殿御覧ぜられ手始よきぞ敵陣の後乃山へ押廻すべし

近江源氏高島隠岐守高信九代の孫氏泰はじめて江州木下に住し木下源四郎と称す氏泰の曽孫即雅楽助高範なり

左あらんには山際より旗を巻て忍びより成ほど静かに義元の本陣へ切入やと下知ありしかば簗田出羽守進み出て敵は今朝より頭丸根を責てその陣を易へてはべし

然バ此分に押寄玉へバ敵の後陣ハ先陣なり今かゝりたる処ハ敵の後ろにして即大将の本陣なりかくてハわれよさる大将の手に近よりてハ唯いそぎをすべしとやゝとばいしくも心付るものなきと高聲に宣ふ聲を諸軍勢承まり何さるに然るべしとまもなく軍勢の氣をはげましたり然るに織田殿開運の時節到来せしと見へ熱田宮乃方より黒雲俄に村立て大雨しきりに降かゝり大風砂を飛バし音をのちゞて聞え海の面墨を摺ながせし如く闇くなり浪の音遠く響きたる上雷電霹靂して世間たゞ今常やみに成りけりと見る程なりしが寄る味方の兵士さへ敵陣ちかくなりにしことを覺束なく思ふなりの有

様なれバ今川勢ハ更に織田殿の帷幕の外まで寄しをしらざれバ本陣の上乃山にのぼるやいな旗をさつとおし上てかゝれ者共と宣ふ聲の下より織田造酒の丞服部小平太宗次林藤八郎興世毛利新助秀詮森三左衛門尉可成中條小市信定遠山甚太郎顯忠毛利河内守簗田出羽守真先に進んでかけたるが森三左衛門尉申けるハ敵ハ大勢なり下立てかゝりなバその内に備を立べし足をためさせてハあしかるなん馬にて懸入蹴ちらさばやと申けるより織田殿實尤之さらバ我を越や若きもの共と馬上より鎗押取て一番に進みけるに雨ますますはげしく雲覆ひ下り白晝なれどもあやめも分ず喚き叫んで馬をもみ入四角

八面に突立追立切立むさしたるにより今川勢すくみのきて
さわぎ謀叛人が有て角やらんといふものもあり或は喧嘩
なりと云ものもあり互に心を置合同士打して騒ぎあふ
者もあり

流布本義元朝臣を近習小姓三百ばかりにて守護し
東をさして落ゆくを木下藤吉郎短兵急に追かけ
しかば義元もはじめは塗輿にのりて落るをかくても延
得じと有合る馬にかきのせて馳たりしに足場あしくそ
はかばかしく進ざりけるを木下藤吉郎追かゝりに
今川殿なるべし御上洛の由承り織田上総介見参の
ため罷出しに見捨て後を見せ給ふその難面けれと

呼たるによりはじめて義元朝臣敵の寄たると知りて
信長の来りしなその義なりしば願ふ処の面會なりと
馬を引返し玉へば織田方の兵士面もふらず攻来り無
二無三に切かゝりけるに義元朝臣の近習馬廻り多く討
れ今は左右に廿人計になりたり義元朝臣は始より
下立士卒を下知して居られしが云甲斐なきその共
の軍乃仕様なれば我を手本にせよと云ながら
今川重代松倉郷の太刀をぬきて近づく敵を切拂ひ
飛鳥の如くさながら業に近付ものさへなかりしと見へ
たり此説その依處をしらず又一説には桑原甚内乃
忍びより竊に差殺したりとも云

義元朝臣ハ屏風引廻し毛氈しき緩やかに在たる處へ
木下藤吉郎走り来て織田上総介信長見参のため参向
せり快よく御首を賜たまへといひも果ぬに服部小平太
宗次進より義元朝臣の右乃太股をさしてかゝりけれども
最期ハなのりけり持たる太刀を取直し小平太が膝のさら
と截られけりたる

小平太幼名ハ要介伊賀國の住人にて弥平兵衛宗清五
代伊賀守宗純が後なり小平太大永六年丙戌に生る
今年三十五歳なり
續いて毛利新助秀詮と名乗てかけより鎗を付たるが
鎗を棄て無手と組刀を抜て脇腹をさし徹し終に組敷

動かざれば此時義元朝臣新助が左の指に噛付たるとも
ともせで終に首を打落し太刀先に貫きて立上る
尾州知多郡大脇村清涼山曹源寺に今川義元朝臣
の位牌あり表に天澤寺殿四品前禮部侍印秀峰
哲公大居士神儀永禄三庚申歳五月十九日戰死
四十三歳とあり裏に永禄三年庚申五月十九日
駿州府中城主今川治部大輔源義元與尾州清洲
之城主織田上総介平信長合戰義元不利而終於
桶狭間戰死當山第二祖立善引導焼香於此畢と
あり松井次郎八宗信の位牌及び鞍泥障を寺に傳
義元朝臣の塚ハ石塚といふ當寺の西八町計にあり

義元朝臣行年四十三歳清和源氏の名家として海道第一の大名といひ武勇も又尋常ならざりしも運盡ぬれば忽ち戦場の土と消果ぬるぞ哀れなる毛利新助織田殿の前に參上し秀詮こそ大將軍を討留て候へとて分捕せし松倉郷の太刀と共に實檢に入しかば信長悦喜限りなく千顆萬顆の玉よりも此首たから得難ハなしとそれを容易く討取けるこそ嬉しけれと云つゝ義元朝臣の首に向ひ涙を流しさしも名高き良將なりしもかく成り玉ふその痛ましけれと歎息ありしかば側に伺公せし侍ども鎧の袖をぬらしけり木下藤吉郎進み出我君の千辛萬苦たゞ此首一つを得玉はんが為諸軍勢の

粉骨もさぞ此首一つの故なりしはやく此首を敵味方に見せ給ふべし然らんには味方は勇氣をまし敵の殘兵は力を失ひて自然に崩るべしと勸め奉りしにより毛利新助ふたゝび太刀の先に貫きて大音聲上今川治部大輔殿をば毛利新助打取たり是見よやとのゝしる側より聲々に大將討れたるに誰が為に軍せるぞ早や冑を脱ぎ降參し命生て故郷に歸らばやとよばはりて責かゝれば朝比奈備中守をはじめ丹下の砦を責んと稲麻をならべし如くなる大勢大に驚き騒ぎ崩れ立て立上りみればいづれも大將の首と見へたりあまりの不思議さに何の思慮もなく散乱し織田方の兵士に

追はめられて討るゝもの多く太刀物具を棄るもを
も少なからず織田殿よきほどに人數を引上ありて追せ
なれば下方九郎左衛門尉といふ者今川の同朋林阿弥を
生捕て大將の陣へ連來りしかば頸數取るより遥にまし
たる手柄之と悦びあひ討取る首どもを見せしに假名
實名を知るもの六十餘人其外なべて二千五百餘級とぞ
聞えけりさてのちに林阿弥にはさゝ海ぐの引出物賜り
て駿河國へ送られけり抑今度木下藤吉郎が七ヶ處の
砦を築き今川の兵士を七ヶ處へ引分け五ヶ處の砦は落
て二ヶ處の砦を堅く守らしめ今川の將士を驕らせ旗本
の兵までも引上し故に本陣無勢になりかゝる始末に及

びしなりされば全く藤吉郎の軍略によりし必竟織田殿は
打勝なひしといふこそ
流布本七ヶ處砦の論あれども窮塞なるにより
是を削る

織田殿首實撿の事
并前田孫四郎勘當を免す事

扨も尾州にては此の一両年今川上洛の沙汰を聞て諸老
臣をはじめ一家中もなべて安き心なく多くは清洲の城に
籠りて防戦せんとのみ勸めたりしに木下一人頻りに迎へ
討て一時に勝敗を決し給へば必定義元朝臣を討捕へしと
申せしに従ひてをのに織田殿の短慮血氣の勇にてやらせま

こゝく危きおりなるのみ多かりしに果して藤吉郎が申
せし如く一戦に討勝て今川治部大輔義元朝臣の首を捕得て
清洲へ凱陣ましけれ今度の勲功をそれぞれに感賞ありて
さて諸将退出しける頃木下藤吉郎首ども多く取持きて
實撿に入る織田殿その首を見るに札を付たり読て見るに
今川家臣江間左京亮頭とありて下に前田某閻王へ土産に
討と記せりあるは江間は聞ゆる勇士なり前田は勘當乃
免ざることを悔みて討死せしなりと不便におぼしめし気色
小見へしが藤吉郎又一ツの首を出し實撿に備へけるにも
遠州住人宍戸弥五郎友辰首とありて前田某未来への土産
に之を討と書たり織田殿いよいよ前田は討死せしとおぼし

めし若きものゝ天晴なる働き健気の振廻なりと宣へとば
聞ぬよしにて藤吉郎又一ツの首を出せこれは今川家老
飯尾豊前守組下駿州住人杉山新吾頭前田某討之とあり扨も
さても思ひもよらぬ働なると宣ふ詞も終らぬに又二ツの首を
出しけるにこれは今川家臣関口大蔵頭前田某討之今川家臣赤間
藤五郎頭前田某討之とあるせり織田殿よにも不審げに是も
前田が討しかと尋ねへば藤吉郎いやとよこれのことなりとて又三ツ
の頭を出しそはじめの頭は鎗下の高名にて此三ツは太刀打乃頭
にては一ツづゝは御隙入には三ツ四ツづゝ御目にかけはべしとて凡十
八九も取出しけるにより織田殿いよいよ驚きたまひかれどの頭を
一人して討捕しを鬼神の所為とこそいふべし實に前田一人が働

かと問ければ藤吉郎面に涙をうかべ前田事御勘気は
免ざれども今度の合戦は君の御大事之一人なりとも御敵を
討て討死し不便の者乃屍やと御覧もあらば是に過たる悦
なしとて鷲津丸根の軍場を始大隅守殿の御手に加わり
軍してゆゆしかりしがいかにも善仕合にて鎗下れ手柄向太刀の切首
なく追打の頸とては一ッもなければ又御勘当の前田之誰か扶助
して頸一ッをも與へ申べきやうなし彼一人の働にては猶彼をのく討取
し頸ありとて取出さんと致したる時織田殿さればこそ蔵人利昌の
子なり勘当うけし主の大事と聞て御免もなきに戦
場へはせ向ひ命を棄てかぎりの働を致したることの猛さ
いさ海しき譬を取にものなし惜むべしくと日頃にも似

させけるにぞ打しをれて聲を上てぞ泣けるこれを見て
侍ども皆おのおの涙をおとしけり勝軍にいさましき躰
ありしも何と致て志あやうに見えたりけるありて藤吉郎
萬卒は得易く一将は得がたし前田が如き侍はよに珍敷
ものなればや實に君の腹心股肱と申べきもの致り今は
御憎もされさせ給ふべし御勘当御免あるべき由やと申
せば織田殿いかにも汝が言の如し勘当せしもかれが若氣を
いましめんためなればいつまで免さでおくべきぞ折もあれ
かし免させんと深く思召けることあるとその期をまち得
ず討死をしことの不便さはあれども魂魄知ことあらば我心中は
かくとあしあるなりされさよと宣ひける時藤吉郎悦びなど

に思召ゆゑく魂魄までもゆるされ正しき前田がその上意を承り弥忠勤を盡し候べしと御勘當御免の上ハ御前へ召出されし何か苦しく候べしと申けれバ織田殿かさねて前田討死せしにちがはざるやと問玉ふに藤吉郎いかにも彼者御勘當をゆりざれども君の御大事なり戦場に向ひ御敵を打くのち切死に死なんと覺期仕り候よしをいひおくりに存ずる子細のゆて彼をのまハ知さバ藤吉郎が家人を前田が跡に從をせて候へで事くはしく存知候なりと申せしかバ急ぎ召出し候へとて前田とめされて懇ろその功を賞しあひ汝を勘當をしを實ハ汝が心を改めて長く我用に立べしとおぼしめしての事なるをさぞうしはちき主君と恨をつらんされども運はよく

かほどの敵を手の下に打取しハ古今そのためしときかバ天晴の勇士なりと宣ひけるによりて前田もよに難有おもひ木下が友をあつしむその篤さを甘心したりけり

流布本木下藤吉郎の評論不審多し因てこれを削る

かの前田此時より孫四郎と改めし由をも注せり但桶狹間の軍乃時ハ又左衛門尉と名乗しと云バ孫四郎と称せしハそれより前とあるべけり又實ハ桶狹間にてハ首二ツありともいひ猶勘氣ハゆるされざりしともいへり刊本七國志にも尾州荒子城主前田主膳亮といふ人の子に縫殿助利春といふ人あり嫡男を藏人利久と云二男を五郎兵衛尉安勝三男を三左衛門尉利玄四男を孫左衛門尉良繼五男右京

亮秀継六男又左衛門尉利家と云信長公寵愛の同朋
十阿彌利家の笄を盗む利家大に憤り討て棄んと怒り
しを信長制し給ひければ十阿弥いよ〳〵寵に誇り散々
悪口をなしけるに於て利家遂に十阿弥を切信長櫓の上にて
是を見給ひ吾命を叛きし罪かろからずとて所領を奪
ひ蟄居せしむ然るに桶狭間にて敵の首を取りければ
猶免し給はざりしかど同じき四年五月西美濃にて勲功ありて
のち免されしといひけり是あるをしるべし

重修眞書太閤記二編巻之二終

重修眞書太閤記二編巻之三

今川義元朝臣の首駿州へ贈る事
并鳴海大高両城退去乃事

鳴海桶狭間の合戦に織田殿大に勝利を得給ひ敵の大将
義元朝臣をはじめ諸侍大将その外名ある兵士多く討取
その首ども清洲に於て實検の式を執行ひ給ふ
周禮に王師大獻則令奏凱樂と云左傳に振旅凱以
入於晋獻俘授馘飲至大賞など云ふ　皇朝にて勝鬨
實検の式と云ともおなじかるべし後周書に武帝平齊夏
四月至自東伐列齊主於其前王公等並従車輿旗

幟及器物以次陳於其後大駕布六軍備凱樂獻俘於
太廟京邑觀者皆稱萬歳とあるハ敵國の主を虜り歸
りし時のことな但馘と云ハ説文に軍戰斷首なりと云
バ首級のことなり莊子列禦寇の篇に槁項黄馘とある
も首級をいふなるべし玉篇にハ截耳なりとも見へたり
詩大雅禮王制の注にも左耳を截て獻ると云と見へ
たれども字林に截耳ハ馘に作り獻首ハ馘に作ると
云ハ截耳獻首の二式ありしなり勝鬨の式ハ首帳を認
めをはりてのち行ふなり貝の役太鼓乃役太刀持
團扇役勝軍木弓真羽箭役旗役南天の手水役太布
手拭の役など別に書あれバ就て見るべし

時に木下藤吉郎今度今川義元朝臣を打取給ふことハ
味方に於て十分の勝利といへども嫡子氏真本國に
在て武功の老臣等と共に領國を持固め候へバ定めて弔
合戰を企て候はんずらん今川勢四万六千と申て候に討死
も二千五百餘人に過ず然れバ猶四万三千餘の殘黨あり
とおぼしめさるべきなりその者ども遠からず押寄候べく
由々敷御大事と存候や御用心ありて然るべからんと言
上ありけるにより織田殿實も汝が申ごとくなり如何致てか
これを待んと宣へバ藤吉郎此事極めて難義なるに似たく
候へども思案を廻し候へバ今川家の諸侍只今まで乃怨
を棄て信實に當方へ歸伏なさしむるこそ謀の候なり

其故ハさしも義元朝臣の首級を厚くもてなし駿州へ
送り遣し敵となり味方となる弓箭取のならひ為
方なき一戦に及びたりけるに打勝たりといへども今も是
までなり御首級を還し入参らする由仰遣さるべく候
偖その討死の邊に一堆の塚を築き大将をはじめ諸侍の
屍を埋め僧衆を請し供養法筵を開き玉ひて敵ながら
義あり禮あり情ふかき振舞なりとその子孫眷族の耳目
に觸れば忽に怨念を散じ情と禮義に向ふ刃ハ折つべし
又此墓を築きて法事を修し玉ひなば道行人も是を
しり遠國他國までも披露し候なれバ必定に候左候
はゞ君の武勇遠く聞え候のみならず弓箭の道乃情

ふかく悔しまをことまでかゝりけるいはさ候はんには
おのづから風になびく草木の如く織田家を慕ひ奉る
座し是いさゝかなる墓五ツ六ツ築きなす費もその
員ならねばその恩徳の報答を幾たりがたきほどに候なん
づるめ氏真ぬしのを内々承たり及び候事の候に年わかくおは
する人の常なからず富貴の家に人となり給へバ花車風流
なることを好ませ玉ふゆゑ結句武藝に踈く詩歌香茶ら堪
能なれども共軍配調練いかにも心に任せ給はずとかや然らバ
程もなく累代の家人に踈まれ候はんを必定に候その時利
を以て招きたまはゞ今川の諸士君の仁心を感じ自然と歸
伏仕候様に相成申べしその上にてハ三州遠州駿州もいつか

當方の有とありけべしたゞちに彼朝臣の首級を送て遣さるれ然るべしと中勸め奉りしにより織田殿大に感じ給ひ即時に義元朝臣の首を箱に納め僧徒十人に是を舁せ生捕の同朋林阿弥を添て駿府へ出立しむ

熊谷次郎直實の敦盛の首級を送りしは舊時は貶近の親しミありしも今時は殘害の讎となりしを弓箭を取身の習ひながら悲歎にあまりての實情之尊氏将軍の楠正成朝臣の首級を送りしは和田楠以下の心を取て南山諸将乃氣を奪ふなるべき計策なり鹿苑院将軍義滿公の山名氏清を誅しその首級を

蔵めて一寺を建立せしこそ今木下が謀慮の根本とも云べし

そのゝち清洲より廿町ばかり南須賀口熱田道に大なる塚を築大卒都婆を造立し法事を修し千部經を讀誦せしめられ

此塚今の世までも現存し御屋形塚と称すとぞ須賀ハ今も愛智郡中村の東なり

さて又鳴海の合戦終りしのち今川勢乃皆掛池鯉鮒鳴原の城ゝ籠りしもの共皆ことごとく恐怖し駿府へ引退しかば智多の郡ハいふに及ばず三州岡崎近き邊までおのづから織田家の旗乃手にしたがひける

見えたりける

尾州愛智郡沓掛ハ上古官道の二村驛なり今ハ二村驛廢して二村山あり土人ハ嶺山とも云鳴海より東北に當る此沓掛の城ハ今川勢退散してのち織田玄蕃允が守る処なりしが後ハ簗田出羽守その後織田越中守川口久助など住せし由云池鯉鮒鴫原ハ參州碧海郡なり鴫原今も重原と書を刈谷乃東なり

然るに鳴海大高兩城のミ堅く守りて落去せず鳴海の城には今川家の老臣岡部五郎兵衛守綱五百餘人にて籠り居けるを織田家の兵士大勢にて押寄せ攻るけれども守綱よく防戦して少しも弱る氣色なし織田殿此由聞召然らば討手をさしむけよやと下知をなし給ひければ藤吉郎進ミ出諸城いづれも開きけるに退散せざる中に岡部一人小勢にて敵を恐るゝ色もなく尋常に軍して更に弱ミを見せざること天晴勇士と申べしこれを攻抜んことハ容易きことながら彼ハ必死の逞兵なり味方も多く討死すべし十分勝利のうち鳴海一城を落さんとて士卒を失はんこと然るべからず若また急に落し得ずば君の武威もうすく聞え且ツハ義元朝臣の首級を送り給ひし仁心も空しくなるべし只このうへハ萬端穩便の御計らひあらまほしくは急き

鳴海を攻る兵士等御呼なくしありてのち別の使者を立られ軍の利害を説しめ玉ひて戰をやめて岡部退散せべしと申けるにより織田殿尤と同心ありて鳴海の寄手をことごとく召返され岡部が方へ申遣されけるやう義元朝臣微運に在し討死なし玉ふ後諸城の諸侍退去の處御邊一人弓箭の道を守り籠城なし玉ふ條忠義といひ武勇といひ感ずるに餘りあり然しながら大將討死の上はその城を誰がために守らせたまふぞや尤城を枕に討死なし玉はんとの御志あるべけれども義元朝臣の子息氏真ぬしおはしますなれば是を補佐なし玉はんことこそ誠心と申べけれ無益に討死なし玉ふべき命

をたゞひ早く城を開わせたまふべし弓矢八幡照覧ましまちあり此方より狼籍の義あるまじけれバ昨日今日一矢射かけしハ全く信長の下知にあらず若侍どものはやり氣にて私のこゝろ心にはけし懸りたる武士の道ハ忠義を詮と立る習ひなり敵なれバとて忠義のために命を惜まぬ侍を何とて賞美せざらんや偽りてその眞なきを討無躰に攻掛るなどいふ拙きことゝ成るは信長にいつれ心安く退去あるべきと細やかに道理を盡して云送られしかバ岡部熟これを聞て織田殿の仁心を感じ實にも仰すこと間なし守綱義元の恩義にむされし寸忠の心にてこの城に踏止りてもあれども外に援る勢もあらねバ御旗をさし

向ふきんには忽落城仕りぬべし然るを武士乃道を
おぼしめし候て退散仕れとの御諚こそ返々悦び入て候
而も然らば速に御下知に従ひ帰國仕るべく候但
守綱心中に願ひ奉る一義の候大将義元の遺骸を
野外に打捨おかんを歎かはしく候君の御方にて御弔ひ
なさることなれども守綱に遺骸を下し賜りなば駿府に
供し候て孝養仕りたく候と申けるに織田殿ふかく
甘心ありて忠臣の本情奇特の所望なりとて即義元
朝臣の遺骸を賜はりけり岡部大に悦び乗物に移し
のこる兵士二百人を以て守護させ我身は三百餘騎にて
後に立城門を開き備をみださず静々と鳴海を引取

その行粧大なるありさまを拂ひ勇々敷見へたりとぞ真に
大丈夫の振舞なりと敵も味方も感賞せしとぞ
一書に岡部五郎兵衛を攻しは佐々成政なりといへり
成政今年廿七八なるべし坂井右近将監盛種の弟
なり余語右衛門大夫菅原盛政入道梅哲乃三男
とぞ云る岡部退去の日を五月廿三日とす本書に義
元の首級は信長より駿府に送るといひ岡部が請て
帰りしは遺骸なりと云一書なるは岡部が請て帰り
しは首級にて遺骸は尾州にて葬埋すと云孰か
是なるをしらず又岡部五郎兵衛鳴海を退て駿府
に赴くとて三州刈屋城を襲ふ城主水野藤九郎防

戰してされは死を藤九郎の兄下野守小川城より
援け來るといへども岡部既に引去て後なれば空
しく引返す氏真岡部を褒て感状を與ふといへり
刈屋といふハ參州碧海郡にして池鯉鮒の南一里半
にあり水野藤九郎信近ハ右衛門大夫忠政の三男
にて下野守信元の弟なり但藤九郎信近ハ永禄
三年五月十九日今川義元合戰の時伊賀衆に攻られ
討死せし由系圖に見えたり廿三日まで存命せしと
疑ふべしその子孫なりけれバその實をしられ
大高の城にてハ十九日未の刻に義元朝臣討死味方敗
北せし由を聞めし大に驚きおぼしめさる處に今川方

の諸城悉く退散して此あたり一圓敵となりぬれバ岡
崎の諸將等諫め奉りとやく退城あそばされ然るべし
と勸め奉るといへども御得心なくして義元朝臣討死の由
聞食といへどもその實否いまだ定かならねば麁忽に城
を開き退散せんハ臆病の至りなるべしと仰出され
ける折ふし小川の水野下野守信元ハ親しき御中なる
によりて敵味方の間ながら其家人淺井六之助を使
として大高へさし越義元討死のうち今川方の諸侍
退散せらるゝ間君もとく岡崎へ御歸城然るべし
と申にく
水野下野守信元といふハ尾州知多郡緒川村の城主

にて水野藏人貞守の曾孫右衛門大夫忠政の嫡子
なり流布本に刈屋乃城主とあるは誤なり
本多酒井の輩これを聞此上は疑ふ処なく早々御退去
然るべしと諫め奉りしかども聞食入ざれば
本多は肥後守忠真なるべし平八郎忠豊の二男平八郎
忠高の弟なり兄忠高は天文十八年二月安祥の軍に討死
しかば大高の時は平八郎といふものなし酒井は雅樂助
政親なり
水野野州も正しき伯父なれども敵方なり我義元の約
束を受て當城を預り守る身なり敵の知るに因て
争でか城をば開き退べきや今朝より面々に仰られし

如く信と義とによりては命を棄んと露惜と思召ば
今にもあれ味方の諸士より告来るそのあらんとき爰
をば退きたまふべしそれ迄に敵よせ來らばいかにも
命を限りに防ぎ戦ふべし必ずさわぎたまひて尾州侍
に笑はるなと仰られ少しも動じたまふ御氣色もなく
落着ておはしませしにより御家人等もその勇氣に恥
静まり返り敵やよせくると待居けるに夜に入て今川家
老朝比奈備中守が許より使を奉りその城に左様にて
ましますも無益なるべし早々御開きあれ然るべしと
申上しかばその夜戌刻の末に大高の城を出御ましく
浅井六之助を案内者として岡崎まで何事もなく

引退かせ給ひけり
五月戌の時には子の方を孤とし午を虚とす大高より
清洲ハ戌亥の方に當り岡崎ハ卯辰の間に當る遁甲
にて夏至下元四日戌時卯辰の方ハ天蓬星と休門
と泊をもて御路次の安泰にましますべき時刻と
ならせられしとや
實に御若年にましませども智勇信義を兼備させら
れし御振舞なりと諸人これを感賞なし奉りしとぞ
抑岡崎の御城に籠りし今川勢一人ものこらず落うせ
て空城となりしかば岡崎累代の御家人この処ハ御代々
の御居城なりいたづらに空しく置せらるべきにあらずと

言上ありけるにより即日御入城ましましければ御城下の
農民商賈までもはやく御歸城ましませかしと願ひける
折なれば大に悦びさゞめく獻上の品を盡し賀し奉りける
となり

木下藤吉郎江州へ禮使の事
并岡崎と駿府と不快乃事

織田家にてハ信長今度戰場に於て勲功ありける
輩へそれぞれに恩賞を賜ふ就中江州より加勢の士卒
を還し禮謝の使をつかはさるべければとて木下藤吉郎承
はり一千三百餘人の者どもへハ悉く褒美を與へ再度
藤吉郎を使として清洲を出立し江州へ赴かしむ但

此者どもハ實に江州の兵士にあらぬとハ織田殿初より
よく知玉へども斯の如くなさゞりしハ首尾整ひたらバ此
今度の勝利を世に知らしめんがためとて藤吉郎を此
もの共へ戦場にて分捕をし甲冑兵器をうけ與へて
のち蜂須賀父子に向ひ御邊等いよいよ織田家に仕
へんと思ひなバ今一両年古郷へ帰り艱難をしのぎ
たまへその故ハ此度ハ佐々木の軍兵と披露せしこと故直に
留まりて奉公なし給ハんこと如何なり殊に大丈夫たるが
その良将を撰て仕ふるに他人の誹謗を請ざる様に
別に勲功を立てのち奉公をすべきなら某又各を引立
る手段ありその時節ハさのみ遠からじ我一左右を

待てバ大功を顕さるべしと懇に諭しけるにぞ蜂
須賀父子も其の深切をよろこび偏に御邊に任せ奉る
上ハよろしく計らひ給へと申により藤吉郎と打連
熱田よりして舟に打のり伊勢海をこえて桑名より
上陸し佐々木家の兵士只今尾州より江州へ帰り
趣を伊勢侍に理りそれより本の道を経て江州へ入
越智川のほとりにて甲冑を脱て擔せ蜂須賀らハ
引かへされ木下一人観音寺の城に上り織田殿よりの禮謝
の使なりと案内せしかバ佐々木家人出迎見るに先に
来りし使者なれバ先々の如く本丸に呼入佐々木屋形對
面有藤吉郎進て座に著先に信長屋形へ御扶助を請

やきしに捨置せしもの甲冑兵器若干借賜なり候ひしにより外聞實儀信長面目を施して候かい五月十九日鳴海表桶はざまと申処にて今川と一戦をなし候処御扶助によりて利運を得四万六千の大敵を切勝剰大将義元を討捕て候へバ残黨摠崩となり全く大勝利を得候段信長に於て満足仕候是に依て借賜ハまし甲冑兵器謹て返し奉て御禮申上候由を述られ桶狭間合戦より廿日餘りも過しことなれバ江州までも軍の風説なれや先達て聞え江州屋形をはじめ信長わづか乃勢をもて大敵に切勝海道第一の勇将今川義元を討捕らるゝと比類なき武功之と沙汰せし処

なれバ木下が口状に信をとり承禎入道もはじめにかわり折あしく分國用心の最中にて軍兵乏しく信長の需に應じかねしのみならず少くの兵器をかし参らせしに丁寧の使者に預り却て痛入て候但御合戦の様いかにやと心懸りにおもひしに大敵を一戦に打破り勝利を得られ候こと弓矢の冥加武士の名誉御手柄の次第申べき詞もなし某迄も悦び存候と色躰あつく木下を様々に饗應をしきりなるも信長を怖ろしき大将なりとおもひなし故なるべし藤吉郎も大に面をほどこして尾州へ立帰りしかバこのちハ織田を斯波の家人とて侮りおもひし心を改め鬼神乃様に

沙汰なる信長と懇志にせでハあしかりぬべしと思案
し漸織田家と交りを結びはじめたり木下清洲に歸
り江州にありて有しぶりを委く言上せしかバ織田殿
悦びたまひ左も有べし佐々木一家の輩乃肝を取ひしぐ
に足たりと勇まれし此年頃心に掛られし今川ハまげ方
付たり是よりいかなる敵を打たるべきやと評定有けるに
藤吉郎いはく未他國に軍勢さし向らるべき時にはあらず
勝て冑の緒をしむるとかハ唯今の時にては随分兵を
練り軍を馴し根本を強くなし給ふべきこと肝要にハ
然くのち何方へなりとも御馬を出さるべくハ只今急
に御出陣はなく今川に打勝奢り狂ふを沙汰仕ふべし

且今川氏真何に軍旅に疎くとも家臣猶多し再度
軍を當國に差向ふべし然ばよろしく是を防ぐ用意を
なし東の一方御心安くおぼしめさる時御出馬の沙汰尤
然るべし去ながら東國を心安くおぼさん方便いふと
尋たまへバ藤吉郎承り左ハ戰國の中に在ても敵を
以て敵を防ぐ術を貴びしとかれ左なくしてハ小勢を以
て大敵を破る事能ハずとや織田殿聞召それハ如何
なる事ぞやと問たまへバ藤吉郎答ふるやう參州岡崎
ハ只今こそ駿河の旗下なれ實ハ累代の城主なれ
去ハ岡崎の諸侍いずれも今川家を怨み憤ること多し
然るに今度義元討死により今川家より籠置たるに

岡崎の軍兵退去せしにより大高より直に入城ありし
かば城下の民ども年来の本意なりしとて悦び所々
にかくれ居たりし譜代の面々ことごとく参集し今は一千
餘騎にも及びぬべし但氏真これを聞たるが今迄今川
家の持城なる岡崎へ私に入部いたせしと云て追出
さんとすべくいくさは必定なり然らば駿河と岡崎と不
快に成んこと又疑ひなし岡崎一千余騎にて駿河の四万
余騎を敵として引受防ぐこと近比難義なるべし是能時節
なれば我君をはやく岡崎と御和睦ありて味方と
なし給ふべし岡崎の御事は御年若けれども万事に
賢くましませば今川を喫止られんに何乃子細かあるべき

今川も又岡崎と當方と和睦ありしと聞ば怒りをと押
へて岡崎へ急に手向ひをなすまじくは是敵を以て
敵を防がしむる謀なればなりやと述られしかば織田殿
大に喜ばせられ他國出馬の沙汰を止め岡崎の容子
を伺ひさせられけるにはたして同年乃暮に至り
岡崎駿府不快なるよし是は義元討死のゝち岡崎より
氏真に弔軍を出されなば先陣仕るべしと度々申送
られしかども氏真父の討死をさのみ悲しともおもはず
ぬにや弔軍の沙汰もなくて只日夜遊樂にふけり淫酒
に長じて在ける故岡崎にても詮方なく織田方の廣瀬
石が瀬といふ所へ打て出させられ所々を切取たまふ

ともかくも織田殿知ぬ顔にて捨置なり
廣瀬といふハ三州賀茂郡にて矢矧川の岸なり城
主ハ三宅氏なりと云石が瀬ハ尾州知多郡大府村
村木村の際にある川の名なり此御合戦ハ此歳六月
のことなり敵ハ水野下野守信元なり御家人鳥井
四郎左衛門大原左近右衛門矢田作十郎高木九助
蜂屋半之丞大久保七郎右衛門同次右衛門等鎗を
合せて勲功あり
岡崎の御勢ひ弥々盛んになり西三河一圓に歸伏し奉り
ければ今川氏真大に怒り岡崎ハ駿府の領なり然
るに自由の振舞以の外なり早々城を明て駿府へ來らせ

らるべしと催促し奉るにより岡崎の諸將大に憤り
義元討死のうち此邊の城々大かた明退き織田家に併
せらるゝ処に岡崎を能持たるさへ敵方の地を切取しこと
氏真より一禮をもなしたまふべき筈なるにさはなくとも
城を明させなどハ奇怪の云状なりその使者の首切
て捨べしと怒りけるを氏真愚にて斯ることを仰越し
たりそれを怒りて罪なきその首切なば是また愚
なる仕業と云べし只道理を説て得心させべしとの
御下知故種々證據を引てや理りを給ひしかども氏真
更に聞入ず岡崎へ馬を出して城を取返すべしと怒るを
なる由聞えけるにより此上ハ力なし今川勢に比ぶれば

十分一にもたらぬ勢ながら敵寄ば十分に戦ふべしと
御下知ありけるとなり

重修真書太閤記二編巻之三終